

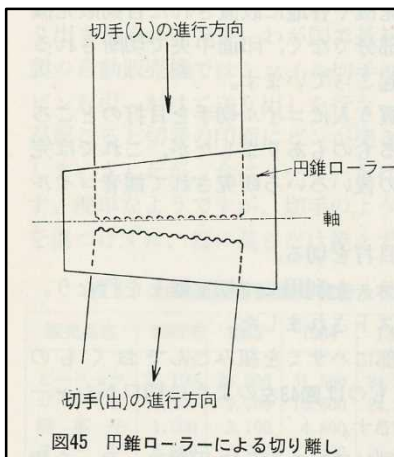
10 円壁画コイルの一般人使用例？

永吉 秀夫

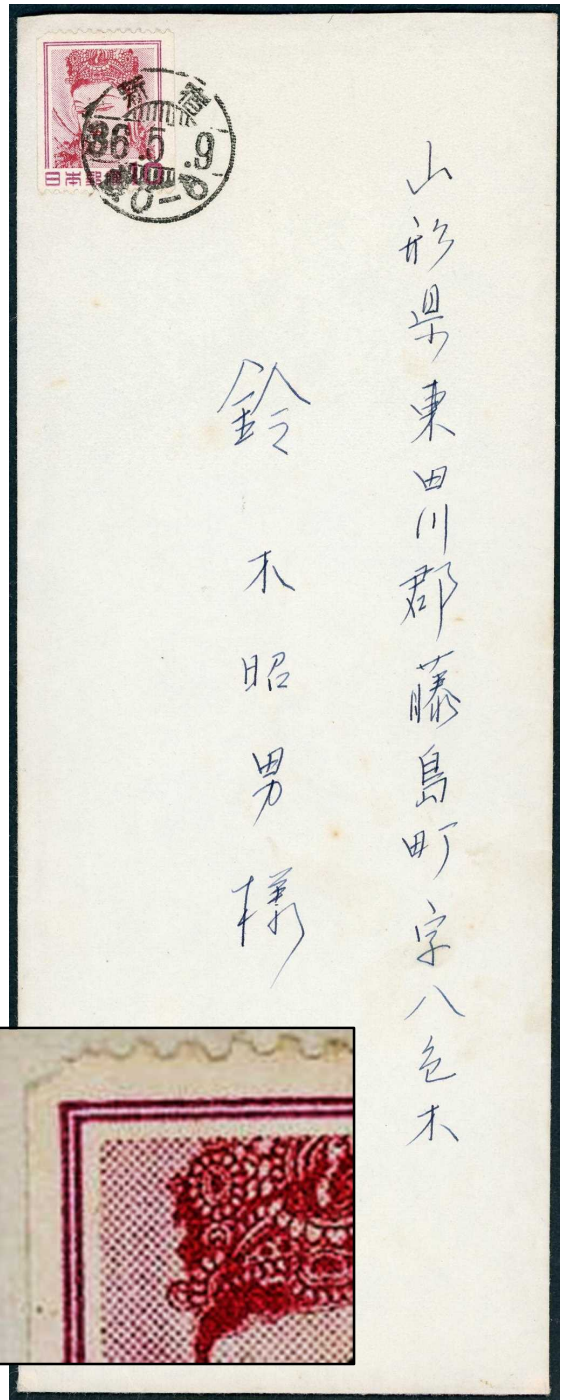
戦後初のコイル切手が1959年1月発行の「10 円壁画」ですが、当初は東京中央局のみの発売でした。翌年4月以降、このコイル切手を販売する自販機が大都市圏を中心に52局に配備されましたが、一般への普及度は極めて低く、残されているカバーは収集家便、それも郵趣窓口等でまとめ買いした切手を貼ったと思われるものばかりです。

そんな中で紹介品は、一般人が自販機で買った切手を貼って差し出したのが確実と思われるカバーです。裏面の差出人名としては宛名人と同姓の高齢女性と思われる名前が、別姓の人物方として書かれています。消印の新宿局は自販機配備局で、差出人の逗留先も近隣の「新宿区角筈」です。消印の日付は後継の「桜コイル」の発行後ですが、自販機ではまだ確実に壁画コイルを販売していた時期です。

決め手は切手の左上隅が、拡大図のように少し欠けていること。当時の販売機では、下の解説図のように販売機内部で切手をねじり切っていたためにしばしばミスカットが起こり、隅の欠けた切手が出てくることがあったそうです。収集家なら嫌がる2級品ですが、一般人なら余程大きく欠けてない限り気にせず使ったことでしょう。



郵趣新書「日本のコイル切手」(鈴木克彦著 1968年日本郵趣協会)より



新宿 S36(1961).5.9 → 山形県